



前月に続いて看取りのお話です。2016年の緩和ケアに関する全国的な研究（J-HOPE3）で、がん患者さんの家族は90%が看取りに立ち会うことを希望し、75%が実際に立ち会えたと報告されています。コロナの面会制限が少しずつ解除され、当緩和ケア病棟でも看取りに立ち会っていただける機会が増えてきているように感じています。何故、看取りに立ち会うことが大事なのでしょう。感謝の気持ちを伝えたい、苦しまないようにお世話したい、とにかく傍にいたい、理由はさまざまでしょう。私たちは事前に看取りの際の立ち合いについて家族に希望を確認するとともに、間に合わない可能性、今できることなどを相談させていただいています。大切な方とのお別れに後悔を残さない、これは医療者の願いです。前出の研究では、希望がありながら看取りに立ち会えなかった遺族の悲嘆の強さは、立ち会えた遺族と有意差なく、悲嘆を深める一番の因子は「患者が大切な人に伝えたいことを伝えられなかったこと」であったと報告されています。最後に印象に残る患者さんの言葉をご紹介します。70歳台の男性、ひとり娘にオムツの世話をしてもらい、照れながらも「先生、死にざまを見せるところまでが親の教育なんですよ」とカッコいい言葉を残して旅立たれました。



## 緩和ケア私の仕事

作業療法士 山野井 勲



緩和ケア病棟では年に数回のコンサートを開催しています。私も病棟スタッフと協同し企画に参加してきました。内容は、トランペットの生演奏、歌のプレゼント、フラダンスなどに加えて季節の企画を実施しています。私は、全体のシナリオ作りを行っています。短い時間ではありますが、手作りの企画に参加された患者様、ご家族からは好評頂いています。時には感動して涙を浮かべる方もいらっしゃいます。私は以前の職場でも患者さんの誕生日会、スタッフの送別会など色々なイベントを企画してきました。私が企画するとき大切にしていることがあります。それは参加されている方々の顔をイメージする事です。会を通じて、どんな気持ちになってほしいか考え顔を思い浮かべます。喜び、感動、わくわくなど企画の目的にあった表情が浮かぶか確認し準備を進めます。「プレゼントを贈る時には、贈られた人が喜んでる顔を思い浮かべようと失敗しないよ」これは義理の母から教えてもらった言葉です。自分で考え何かを贈るときにその言葉を思い出します。仕事でプレゼンするとき、イベントを企画するときも同じです。そしてそのイメージが自分の方向を決め、気持ちを動かし、企画準備や交渉も不安なく進められます。そして、当日を迎え会に参加された患者様やご家族のイメージした表情が見れたとき、とても達成感を感じます。今後も良い時間が過ごせるよう病棟スタッフと関わって行きたいと思います。

## 緩和ケア・テラス新聞⑨

埼玉協同病院東5病棟

2026年3月号

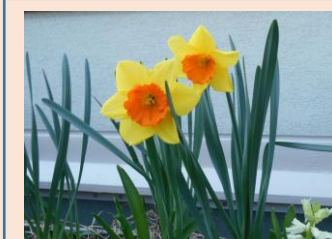


テラスにも春がきました。

ヒヤシンス

スイセン

ラナンキュラス



埼玉協同病院東5階緩和ケア病棟のホームページは  
こちらからもご覧になれます。



今後のイベント予定  
・未定